

G20首席農業研究者会議 (MACS) の結果概要について

平成31年4月24日（水曜日）から26日（金曜日）に、G20首席農業研究者会議（MACS）を我が国主催で開催しましたので、その概要をお知らせします。

1. G20首席農業研究者会議 (MACS) の概要

農林水産省は、平成31年4月24日（水曜日）から26日（金曜日）に、G20首席農業研究者会議（MACS: Meeting of Agricultural Chief Scientists）を開催いたしました。G20首席農業研究者会議（MACS）は、G20各国及び国際研究機関の首席農業研究者及び農業研究行政官が参集し、世界における研究の優先事項を協議するとともに、各国及び国際研究機関の連携を強化することを目的とした会合です。本会合は、2012年から毎年G20議長国で開催しており、2019年で第8回目となります。本年は我が国が議長国となり、我が国で初めて開催しました。

主要議題

- （1）2018年G20MACSの合意事項の検討状況フォローアップ
- （2）越境性植物病害虫の研究に係る国際連携
- （3）気候変動対応技術の導入に係る国際連携

2. 日程

（1）平成31年4月24日（水曜日）
宮城県における東日本大震災被災地の農業復興事業の視察

（2）平成31年4月25日（木曜日）
G20MACS本会合（1日目）

- ・開会（議長（岩永農林水産省顧問））
- ・開会での歓迎挨拶（高鳥農林水産副大臣）
- ・基調講演（久間農研機構理事長）
- ・2018年G20MACSの合意事項の検討状況フォローアップ
- 総論（報告者：日本）
- 土壌（報告者：フランス及びロシア）
- 農業生態系リビングラボ（報告者：カナダ及び米国）
- 農業技術共有（報告者：中国）
- 食品ロス・廃棄物の低減（報告者：ドイツ）
- ・越境性植物病害虫の研究に係る国際連携に係る討議
- ・レセプション（吉川農林水産大臣、高野農林水産大臣政務官出席）

（3）平成31年4月26日（金曜日）
G20MACS本会合（2日目）

- ・気候変動対応技術導入のための社会実験的アプローチに係る討議
- ・コミュニケ作成
- ・2020年G20MACSの展望（次期開催国サウジアラビア）

・閉会

3. 場所（4月25～26日）

ホテルグランドパレス（東京都千代田区飯田橋）

4. 出席者

（1）G20

G20の首席農業研究者（アルゼンチン、オーストラリア、ブラジル、カナダ、中国、フランス、ドイツ、インド、インドネシア、イタリア、日本、メキシコ、韓国、ロシア、サウジアラビア、南アフリカ共和国、トルコ、英国、米国、欧州連合（EU））

日本側出席者は、

（ア）農林水産省：吉川農林水産大臣、高鳥農林水産副大臣、高野農林水産大臣政務官、岩永農林水産省顧問（G20MACS議長／国際農研理事長）、別所農林水産技術会議事務局長、島田研究総務官、鴨志田国際研究官ほか

（イ）農研機構：久間理事長、松田理事ほか

（ウ）国際農研研究者ほか

（2）招待国

オランダ、スペイン

（3）国際機関

国際農業・バイオ科学センター（CABI）、国際農業研究協議グループ（CGIAR）システム管理事務局、国際熱帯農業センター（CIAT）、国際とうもろこし・小麦改良センター（CIMMYT）、国際食料政策研究所（IFPRI）、国連食糧農業機関（FAO）、国際植物防疫条約（IPPC）事務局、農業分野の温室効果ガスに関するグローバル・リサーチ・アライアンス（GRA）、世界銀行

5. 結果概要

（1）G20首席農業研究者会議（MACS）

「越境性植物病害虫」、「気候変動対応技術導入のための社会実験的アプローチ」について、我が国から（ア）2019年の関連ワークショップの主催、（イ）国際研究連携の強化、（ウ）国際機関との連携強化等を提案し、支持されました。そして、G20農業大臣に対し、これらの連携強化の活動を支持するよう提言がなされました。

また、これまでのG20MACSの議論から生じた作業部会やイニシアチブについて現状報告がなされるとともに、MACSから生じる作業部会及びイニシアチブのための指針案を次回のG20MACSの前に作るためのタスクフォースが新たに立ち上げられることが合意されました（詳細は別添資料）。

（2）その他（我が国の研究成果のPR等）

4月24日は、宮城県で先端施設園芸（いちご）、乾田直播等を通じた東日本大震災からの復興の取組やロボットトラクタ実演を視察しました。

また、4月25～26日の本会合中、展示スペースを設置し、我が国がG20MACSで提案した2つのテーマに係る農研機構と国際農研の研究成果に関するパネル展示や物品を展示するとともに、農林水産技術会議事務局の事業で開発・実用化したアシストスーツの実演も行いました。さらに、農研機構の研究成果で機能性を有する食品を、休憩時の飲料やレセプションのメニューで使用し、広報を図りました。

< 添付資料 >

G20首席農業研究者会議（G20MACS）の結果（概要）

【お問合せ先】

農林水産技術会議事務局国際研究官室

担当者：田中、佐藤

代表：03-3502-8111（内線5902）

ダイヤルイン：03-3502-7466

FAX：03-5511-8788

G20 首席農業研究者会議（G20MACS）の結果（概要）

1. 日時：平成 31 年 4 月 24 日（水）～ 26 日（金）
（※24 日は宮城県で東日本大震災被災地の農業復興事業等を視察）
2. 場所（25～26 日）：日本・東京（ホテルグランドパレス）
3. 主催：農林水産省
議長：岩永勝 農林水産省顧問（国際農林水産業研究センター（国際農研）理事長）
4. 出席者
 - （1）我が国
農林水産省：吉川農林水産大臣（レセプション）、高鳥農林水産副大臣（開会での歓迎挨拶）、高野農林水産大臣政務官（レセプション）、岩永農林水産省顧問（議長）、別所農林水産技術会議事務局長、島田研究総務官、鴨志田国際研究官他
農研機構：久間理事長、松田理事他、国際農研関係者
 - （2）G20 メンバー代表（亜、豪、伯、加、中、仏、独、印、尼、伊、墨、韓、露、サウジ、南ア、土、英、米、EU）
※なお、G20 メンバー全てが G20MACS に出席したのは今回が初めて。
 - （3）招待国（蘭、西）
 - （4）国際機関（国際農業・バイオ科学センター（CABI）、国際農業研究協議グループ（CGIAR）システム管理事務局、国際熱帯農業センター（CIAT）、国際とうもろこし・小麦改良センター（CIMMYT）、国際食料政策研究所（IFPRI）、国連食糧農業機関（FAO）、国際植物防疫条約（IPPC）事務局、農業分野の温室効果ガスに関するグローバル・リサーチ・アライアンス（GRA）、世界銀行）
5. 概要
 - （1）今回の MACS で、我が国は議長国として「越境性植物病害虫」及び「気候変動対応技術導入のための社会実験的アプローチ」に関する研究の国際連携の推進を主要な議題として取り上げた（参考：議事次第）。
 - （2）「越境性植物病害虫」については、食料安全保障と環境に対する深刻な脅威となっていることが認識された。病害虫の発生や管理に関する G20 メンバー等の経験や最新情報を共有し、効果的な対策のための研究連携を促進するため、本年にワークショップを開催することを我が国から提案し、支持された。
また、研究機関等のネットワークの構築及びネットワーク内外の関係者の自発的交流が奨励され、関心を持つ G20 メンバーが共同研究等の研究協力を促進できることが確認された。そして、G20 農業大臣に対し、越境性病害虫の研究協力を促進するため、これらの活動を支持することを提言した。
 - （3）「気候変動対応技術」については、革新的な農業技術の開発と実践により持続可能な食料生産を支え、農業分野の温室効果ガス（GHG）を削減することができるという見解が共有された。気候変動対応技術の開発と普及に関する経験と最新情報を共有し、研究連携を促進するため、本年にワークショップを開催することを我が国から提案し、支持された。
また、関心を持つ G20 メンバーが、気候変動対応技術の導入に関心を

有する国との間での研究連携を強化できること、このような連携には、社会実験的アプローチを用いた現場での実証事業の実施が含まれ得ることも確認された。そして、G20 農業大臣に対し、これらの研究連携を強化する自発的な活動を支持することを提言した。

- (4) 過去の MACS から生じた作業部会及びイニシアチブの活動状況が認識された。特に、農業生態系リビングラボ（ALL）アプローチ（※）が、持続可能な農業のための新しい革新的な技術の導入を加速・拡大することに資するものであると認識された。

また、MACS から生じる作業部会及びイニシアチブのための指針案を次回の G20MACS の前に作るためのタスクフォースが新たに立ち上げられることが合意された。

- (5) 最後に、来年の G20 議長国であるサウジアラビア代表から、次回の G20MACS の展望について紹介がなされた。

※農業生態系リビングラボ（ALL）：新規及び既存の農法及び技術の効果を改善し早期の採用を図るため、実際の環境において農業者、科学者及びその他の関心を持つパートナーがこれらの農法・技術の共同設計、モニタリング、評価に関与する学際的アプローチ。

以上

G20 首席農業研究者会議（MACS） 議事次第

4月25日（木）：会合1日目（会場：ホテルグランドパレス（東京））

- 09:00 - 09:05 開会（議長（岩永農林水産省顧問））
- 09:05 - 09:15 開会での歓迎挨拶（高鳥農林水産副大臣）
- 09:15 - 09:40 基調講演（久間農研機構理事長）
- 09:45 - 12:50 2018 年 G20MACS の合意事項の検討状況フォローアップ
- 総論（報告者：日本）
 - 土壌（報告者：フランス及びロシア）
 - 農業生態系リビングラボ（報告者：カナダ及び米国）
 - 農業技術共有（報告者：中国）
 - 食品ロス・廃棄の低減（報告者：ドイツ）
- 14:30 - 18:00 越境性植物病害虫
- 19:00- レセプション（吉川農林水産大臣、高野農林水産大臣政務官）

4月26日（金）：会合2日目（会場：ホテルグランドパレス（東京））

- 09:00 - 12:30 気候変動対応技術導入のための社会実験的アプローチ
- 13:30 - 17:30 コミュニケ作成
- 17:30 - 17:50 2020 年 G20MACS の展望（次期開催国サウジアラビア）
- 17:50 - 18:00 閉会

G20 Japan 2019
8th Meeting of Agricultural Chief Scientists (MACS)
Communiqué

1. We, the Agricultural Chief Scientists from G20 members, met in Tokyo, Japan on 25th and 26th April 2019, along with participants from guest countries and international organizations¹. During discussions and building on the outcome of previous meetings, we recognized the need to continue advocating for science-based decision making as a foundation for advancing global food production. Science and technology play critical roles in ensuring that the global food system can meet the challenges of a growing population and changing environment. We recognize that research and innovation are critical for sustainable productivity growth in the agri-food sector and are vital in delivering solutions on a wide range of issues to farmers. The Agricultural Chief Scientists from G20 members have a major role to play in this and in ensuring that a collaborative approach is followed where appropriate.
2. In Tokyo, we discussed global research priorities in agriculture; methods of facilitating collaboration among G20 members and with relevant stakeholders; and ways of supporting discussions by G20 Agriculture Ministers to be held in Niigata, Japan on 11th and 12th May 2019, especially regarding innovation towards sustainability of the agri-food sector, and collaboration and knowledge exchange to address global issues. We look forward to continuing to advise Ministers on scientific and strategic issues arising from their meeting in Niigata.
3. We heard a keynote presentation which provided a holistic view of the dynamic role of innovative agricultural research in economic and social development. Subsequent discussions focused mainly on three topics: transboundary plant pests²; social experiment-like approaches³ to facilitating on-site adoption of climate-smart technologies and practices for sustainable agriculture; and stocktaking of discussions in, and initiatives emanating from, past Meetings of G20 Agricultural Chief Scientists (MACS-G20).

¹ Participants included representatives from G20 members (Argentina, Australia, Brazil, Canada, China, European Union, France, Germany, India, Indonesia, Italy, Japan, Mexico, Republic of Korea, Russian Federation, Saudi Arabia, South Africa, Turkey, United Kingdom and United States of America), guest countries (the Netherlands and Spain), and international organizations (CABI, CIAT, CIMMYT, CGIAR, IFPRI, IPPC, FAO, GRA and the World Bank).

² “Pest” means “any species, strain or biotype of plant, animal or pathogenic agent injurious to plants or plant products” based on the definition used in the International Plant Protection Convention.

³ The proposed concept of “social experiment-like approach” is an experimental approach in which technologies are introduced in combination with supporting policies and measures, under collaboration between natural and social sciences, within a targeted area and period.

4. We recognize that transboundary plant pests have become a serious threat to food security and the environment that may be exacerbated by changing climate conditions and the globalized movement of people and commodities. We acknowledge that it is important for our research institutions to implement effective actions through international collaboration, including with developing countries.
5. Therefore, we support the proposal from Japan to hold an international workshop later in the year in order to share experiences of G20 members and invited guests, and the latest information on the occurrence and management of plant pests, and facilitate international research collaboration to help develop effective countermeasures for major plant pests. This could include diagnostic technologies, epidemiology, monitoring technologies, border measures to avert introduction and measures for prevention and control.
6. We also encourage diagnostic laboratories, research institutes and universities to establish networks among themselves, and to promote voluntary interactions within these networks and with other stakeholders. Interested G20 members could target certain major transboundary plant pests for research cooperation, including implementation of international joint research projects. We welcome the adoption of the UN resolution on the International Year of Plant Health 2020, and recommend that G20 Agriculture Ministers support the above-mentioned activities to facilitate research collaboration on transboundary plant pests and thus contribute to sustainable food production.
7. We recognize the importance of electronic phytosanitary certification (ePhyto) as a technological solution that, when globally implemented, will support efforts to minimize the spread of transboundary plant pests and provide a mechanism for rapid response to identified issues. We support the International Plant Protection Convention (IPPC) in the implementation of ePhyto and encourage participation in this important IPPC initiative.
8. We recognize that the agricultural sector is particularly vulnerable to the impacts of changing climate conditions and weather variability, while also being a source and sink of greenhouse gases (GHG). We share the view that the development and implementation of innovative agricultural technologies and practices can support sustainable food production, climate resilience, carbon sequestration, and reduce GHG emissions from agriculture. In this respect, we welcome initiatives that facilitate international research and public-private partnerships on this topic.

9. Therefore, we support the proposal from Japan to hold a workshop later in the year to share the experiences of G20 countries and invited guests, and the latest information and facilitate research collaboration in the development and scaling up and out of climate-smart technologies and practices for sustainable agriculture. This may include monitoring climate change; impact assessment; development of new plant varieties; management practices for adaptation and mitigation; reduction of GHG emissions and enhancement of carbon sequestration.
10. Interested G20 members could identify sustainable adaptation and/or mitigation technologies and practices for scaling up and out, and strengthen research collaboration with countries that are interested in the introduction of these technologies. This collaboration may include implementing on-site pilot projects using social experiment-like approaches such as Agroecosystem Living Labs⁴ (ALL) and climate resilient village⁵ as well as cross-cutting approaches that might be identified by G20 members including data management. We recommend that G20 Agriculture Ministers support these voluntary activities that strengthen research collaboration for scaling up and out climate-smart technologies and practices for sustainable agriculture.
11. In order to tackle transboundary plant pests and scale up and out climate-smart technologies and practices for sustainable agriculture, we acknowledge the importance of strengthening coordination and collaboration with existing relevant international and regional activities and networks.
12. We take note of the stocktaking reports on activities emanating from the MACS-G20 prepared by Japan, Argentina, and lead countries of working groups and initiatives. We acknowledge the importance of continuing this stocktaking exercise.
13. We decided on a task force to be co-chaired by Australia and the United States to develop guiding principles for working groups and initiatives emanating from MACS. The task force plans to deliver draft principles to MACS country representatives two months in advance of, for review and approval at, the 2020 MACS. The guiding principles may be incorporated into the MACS Terms of Reference after approval.

⁴ The term “Agroecosystem Living Labs” is defined as “transdisciplinary approaches which involve farmers, scientists and other interested partners in the co-design, monitoring and evaluation of new and existing agricultural practices and technologies on working landscapes to improve their effectiveness and early adoption.”

⁵ Climate Resilient Village (CRV) is the one where climate resilient agriculture is practiced, that encompasses the implementation of adaptation and mitigation practices in agriculture which increases the capacity of the system to respond to various climate related disturbances by resisting damage and ensuring quick recovery.

14. We acknowledge that during its presidency, Japan is maintaining and updating the MACS-G20 website, which was established by Germany in 2017 to assist the MACS community in keeping track between G20 presidencies of relevant documents, events, photo gallery and contacts for G20 members. This website will also provide access to information on the ongoing activities by interested G20 members emanating from MACS-G20.
15. We recognize the ongoing voluntary efforts of the working groups on sustainable soil management led by France and Russia, and Agricultural Technology Sharing (ATS) led by China. We also support continuing efforts of collaborative work on reduction of food loss and waste led by Germany, and welcome the report on activities derived from the cooperation between Germany and other relevant stakeholders and members. We also recognize the ongoing voluntary efforts of the United Kingdom to scope on international networks on genetic diversity.
16. We welcome the Executive Report submitted to the 8th MACS-G20 by the working group led by Canada and the United States on Agroecosystem Living Labs (ALL), which summarizes the current state of utilization of ALL approaches and best practices in participating countries. We also acknowledge that implementing ALL could increase the speed and spread of adoption of new innovative practices and technologies for sustainable agriculture.
17. We look forward to the next MACS-G20, to be hosted by Saudi Arabia in 2020.

第8回 G20 首席農業研究者会議 (MACS) (2019 年、日本)

コミュニケ (仮訳)

1. 我々 G20 メンバーの首席農業研究者は、招待国及び国際機関からの参加者と共に、日本国・東京にて 2019 年 4 月 25 日及び 26 日に会合を行った¹。我々は、議論の中で、及びこれまでの会合の結果に基づいて、世界の食料生産を進展させていく基礎として、科学に基づく意思決定を継続して唱道することの重要性を認識した。科学技術は、世界の食料システムが人口増加や環境変化という課題に対応できるよう確保するために決定的に重要な役割を果たす。我々は、研究とイノベーションが、農業・食品分野における生産性の持続可能な向上のために決定的に重要であり、農業者の広範な問題に解決策を提示する上で不可欠なものであると認識している。G20 メンバーの首席農業研究者はこのために、そして適切な場合には協力的なアプローチがとられるよう確保する上で、主要な役割を担う。
2. 我々は東京で、農業分野における世界的な研究の優先事項について、また G20 メンバー間及び関係者との連携の円滑化の方法について、さらに 2019 年 5 月 11 日及び 12 日に日本国・新潟で開催される G20 農業大臣会合の議論を、特に農業・食品分野の持続可能性に向けたイノベーションや、世界的な課題に取り組むための協力及び知識の共有に関して、どのように支援することができるかについて議論を行った。我々は、新潟の会合で提起される科学的及び戦略的な課題に関し、農業大臣に対し引き続き助言を行うことを楽しみにしている。
3. 我々は、革新的な農業研究が経済及び社会の発展に果たす動的な役割について、包括的な視点を提供する基調講演を聞いた。その後、越境性植物病害虫²、持続可能な農業のための気候変動対応技術及び農法の現場導入を推進するための社会実験的アプローチ³、過去の G20 首席農業研究者会議 (MACS-G20) での議論及び過去の MACS-G20 から生じたイニシアチブに関するストックテーキングの 3 つの議題に主に焦点を当てて議論を行った。
4. 我々は、越境性植物病害虫が、食料安全保障と環境に対する深刻な脅威となってお

¹ 参加者は、G20 メンバー（アルゼンチン、オーストラリア、ブラジル、カナダ、中国、欧州連合、フランス、ドイツ、インド、インドネシア、イタリア、日本、メキシコ、韓国、ロシア連邦、サウジアラビア、南アフリカ、トルコ、英国、米国）、招待国（オランダ、スペイン）、国際機関（CABI、CIAT、CIMMYT、CGIAR、IFPRI、IPPC、FAO、GRA、世界銀行）の代表者を含む。

² 病害虫とは、国際植物防疫条約（IPPC）の定義に基づき、「植物、動物又は病原体のあらゆる種、ストレイン又はバイオタイプであって、植物又は植物生産物に有害なもの」を意味する。

³ 提案された「社会実験的アプローチ」のコンセプトは、「対象の地域と期間を限定し、自然科学と社会科学の連携の下、支援施策・措置を組み合わせる技術を導入する実験的なアプローチ」である。

り、変化する気候条件や人と商品のグローバルな移動によって悪化している可能性があることを認識する。我々は、自らの研究機関が、途上国を含む国際連携を通じて効果的な対策を講じることの重要性を認識する。

5. このため、我々は、G20 メンバー及び招待者の経験や植物病虫害の発生及び管理に関する最新情報を共有するとともに、重要な植物病虫害への効果的な対策を開発する助けとなる国際的な研究連携を促進するために、本年、国際ワークショップを開催するという日本の提案を支持する。これには、診断技術、疫学、モニタリング技術、越境防止措置、及び予防や防除のための措置等が含まれる。
6. 我々は、また、病虫害診断の研究所、研究機関及び大学が相互間のネットワークを構築するとともに、これらのネットワーク内及びその他の関係者との自発的な交流を促進することを奨励する。関心を持つ G20 メンバーは、国際的な共同研究事業の実施を含む研究協力のために、その対象となる主な越境性植物病虫害を定めることができる。我々は、2020 年を国際植物防疫年とする国連の決議の採択を歓迎するとともに、G20 の農業大臣に対し、越境性植物病虫害に関する研究協力を促進し、それによって持続的な食料生産に貢献するため、上記の活動を支持することを提言する。
7. 我々は、世界的に実施されれば、越境性植物病虫害のまん延を最小限に抑えるための努力を支え、特定された課題に対して迅速な対応をとる仕組みを提供する技術的な解決策として、電子植物検疫証明 (ePhyto) の重要性を認識する。我々は、ePhyto の実施において、国際植物防疫条約 (IPPC) を支持し、この重要な IPPC のイニシアチブに参加することを促す。
8. 我々は、農業分野が、変化する気象条件や変わりやすい気象状況の影響を特に受けやすい一方で、温室効果ガス (GHG) の排出源かつ吸収源であることを認識する。我々は、革新的な農業技術及び農法の開発と実践は、持続可能な食料生産、気候変動に対する強靱性、土壌炭素貯留を支え、農業分野における GHG を削減し得るという見解を共有する。この点において、我々は、この課題に関する国際研究及び官民連携を促進するイニシアチブを歓迎する。
9. このため、我々は持続可能な農業のための気候変動対応技術・農法の開発と導入・拡大に関する G20 諸国及び招待者の経験や最新情報を共有し、研究連携を促進するために本年ワークショップを開催するという日本の提案を支持する。これには、気候変動のモニタリング、影響評価、新たな植物の品種の開発、適応・緩和のための管理方法、GHG 排出の削減及び炭素貯留の強化が含まれ得る。

- 1 0. 関心を持つ G20 メンバーは、導入・拡大すべき持続可能な、気候変動の適応及び又は緩和の技術及び農法を定め、これらの技術の導入に関心を有する国との間で研究連携を強化することができる。この連携には、農業生態系リビング・ラボ（ALL）⁴や気候変動対応型村落⁵、及び G20 メンバーにより特定され得る分野横断的なアプローチ（データ管理を含む）等の、社会実験的アプローチを用いた現場での実証事業の実施が含まれ得る。我々は、G20 の農業大臣に対し、持続可能な農業のための気候変動対応技術・農法の導入・拡大に向けた研究連携を強化するこれらの自発的な活動を支持することを提言する。
- 1 1. 我々は、越境性植物病害虫への対応及び持続可能な農業のための気候変動対応技術・農法の導入・拡大のために、関係する既存の国際的及び地域的な活動及びネットワークとの調整及び連携を強化することの重要性を認識する。
- 1 2. 我々は、日本、アルゼンチン並びに作業部会及びイニシアチブの主導国が作成した、MACS-G20 から生じた活動のストックテーキングに関する報告に留意する。我々は、このストックテーキングの取組を継続することの重要性を認識する。
- 1 3. 我々は、MACS から生じる作業部会及びイニシアチブのための指針を作るための、豪州と米国が共同議長を務めるタスクフォースを決定した。このタスクフォースは、2020 年に開催される MACS で精査し、承認するために、2020 年の MACS の 2 か月前に、指針の案を MACS の各国代表に提出することを計画している。この指針は、承認を得た後、MACS の委任事項に盛り込まれ得る。
- 1 4. 我々は、G20 の議長国が引き継がれる中で、MACS の関係者が、G20 メンバーのために、関連する文書、イベント、写真集、連絡先を把握できるように支援するために 2017 年にドイツが立ち上げた MACS-G20 のウェブサイトの管理及び更新を、日本が議長国を務める間行っていることを認識する。また、このウェブサイトは、MACS-G20 から生じる、関心を持つ G20 メンバーにより進行中の活動に関する情報へのアクセスを提供する。
- 1 5. 我々は、フランス及びロシアが主導する持続可能な土壌管理に関する作業部会及び中国が主導する農業技術共有（ATS）に関する作業部会が実施中の自発的な取組を認識する。また、我々はドイツが主導する食品ロス・廃棄の削減に関する協働の継続

⁴ 「農業生態系リビング・ラボ（ALL）」とは、「新規及び既存の農法及び技術の効果を改善し早期の採用を図るため、実際の環境において農業者、科学者及びその他の関心を持つパートナーがこれらの農法・技術の共同設計、モニタリング、評価に関与する学際的アプローチ」と定義される。

⁵ 気候変動対応型村落（CRV）とは、気候変動の被害に対応し、迅速な回復を確保することによって、気候変動に関連する様々なく乱に対応する体制の能力を高める、適応及び緩和の農業慣行の実施を含む、気候変動に強靱な農業が実践されている村落をいう。

的な取組を支持し、ドイツと他の関係者及びメンバーとの協力により生じた活動に関する報告を歓迎する。さらに、我々は、英国が遺伝的多様性に関する国際的なネットワークを調べる自発的な取組を認識する。

16. 我々は、カナダ及び米国が主導する農業生態系リビング・ラボ（ALL）に関する作業部会が、第8回 MACS-G20 に提出した、ALL アプローチの活用現状や参加国における優良事例を要約したエグゼクティブ・レポートを歓迎する。我々は ALL の実施が、持続可能な農業のための新たな革新的な農法と技術の導入を加速し拡大することに資するものであると認識する。

17. 我々は、2020 年にサウジアラビアが開催する次回の MACS-G20 を楽しみにしている。